

## 日本の影響下でのモンゴル語定期刊行物について

著者	兵 軍
著者別名	BING Jun
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	53
ページ	55-62
発行年	2016
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008831/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008831/</a>

# 日本の影響下でのモンゴル語定期刊行物について

社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了

兵 軍

## 1. はじめに

1929年から1945年の間発行されていたモンゴル語の新聞や雑誌の多くは日本の直接的、間接的な影響を受けていた。この時期の日本の影響を受けていた新聞や雑誌をおおかに在日留学生時代、満洲国時代、蒙疆政権時代という三つの時期に分けてみる事ができる。

1906年から始め日本に留学していたモンゴル人留学生らは「蒙古留日学生会」を組織し、1929年に機関紙『祖国』を発行した。その後に留学生らは日本で『漠声』、『新モンゴル』などの新聞を発行していた。これらの新聞が日本の影響を大きく受けている。

1931年9月の満洲事変が発生したあと、日本政府の影響によって中国東北部に満洲国が設けられ、内モンゴル東部地域のモンゴル人たちは満洲国に組み込まれる。満洲国はモンゴル人に対する宣伝政策に着手し、政府の新京にモンゴル語の印刷所を設立してモンゴル語の新聞や雑誌の発行を開始した。満洲国時代に発行されていたモンゴル語の新聞や雑誌には『モンゴル・セトグール』(蒙古報)、『モンゴル・シネ・セトグール』(蒙古新報)、『フフ・トグ』(青旗)、『ジャロースン・トリ』(青年の鑑)、『イフ・フフ・トグ』(大青旗)などがある。これらの新聞や雑誌は満洲国の興安総署、蒙政部、蒙古会館などの機関から刊行されており、その内容は満洲国の直接な影響を受けている。

また、1936年から設立され、その管轄範囲が内モンゴルの中西部地域まで及んだ蒙疆政権は、当時の日本政府の影響を大きく受けていた。この蒙疆政権時代には『蒙古週刊』、『蒙古報』、『文化専刊』、『蒙古復興の声』、『蒙古復興』などのモンゴル語の新聞や雑誌が発行されており、その内容も満洲国時代のモンゴル語の新聞や雑誌と異なる点はあるとはいえ日本政府の影響を大きく受けていた。

本論では、これら日本の影響をうけていたモンゴル語の新聞や雑誌の発行背景や発行機関、発行期間、編集者、掲載内容などを考察し、それぞれの特性を明らかにするものである。

## 2. 在日留学生時代のモンゴル語定期刊行物

19世紀末から内モンゴル自治区赤峰市ハラチン旗（当時はジョスト盟ハラチン右旗）のグ

ンサンノルブ親王はモンゴル社会の近代化の必要性を認識し、学校教育に力を注ぎ、自ら開設した学校に日本人教師を招いて日本語教育を行うとともに日本へ留学生を派遣した。1906年、ゲンサンノルブ親王によって女子学生3人、男子学生5人が日本へ留学することになった。これが最初のモンゴル人としての日本留学生である。その後20年間、モンゴル人留学生の人数はあまり増加しなかったが、1925年以降笹目恒雄という日本人の支援によって留学生数が増加することになる。また満洲国が成立後、日本への留学生派遣を制度化して推進した<sup>1</sup>。

1920年代に、日本に学んでいたモンゴル人留学生らはモンゴル民族の啓蒙を目的として蒙古留日学生会を組織した。この蒙古留日学生会が1929年に機関誌『祖国』をモンゴル語と中国語で発行し、編集作業をモンゴル人留学生のアスハンとオヨンダライが担った。『祖国』の現存は未だに見付かっていないが、第2号の目次と一部内容の日本語抄訳が残されている。それによると、『祖国』2号は「評論」、「文学」、「翻訳作品」、「特選文章」、「感想文」などの五つのコラムから構成されている。「評論」には『民族革命、社会革命とモンゴルの革命』、『自由をどう勝ちとるかについて』、『権力と利益への欲望と今日のモンゴル人』、『モンゴルに対する三民主義の政策』、『モンゴルの問題』というタイトルの評論を掲載した。「文学」には『祖国に帰った後の自分』、『峰の上の松』、『祖国』、『友人』、『モンゴルのために悲しむ』等の作品がある。「翻訳作品」には『近代モンゴルに関する研究』、『民族の起源と発展』、『外モンゴルの教育に関する調査』、『外モンゴルの経済について』という文章が掲載されており、「感想文」には『自分が民族を救う方法を語る』、『通知』、『後書き』、『文章の規制』などを掲載した<sup>2</sup>。これらのタイトルから推測しても分かるように、『祖国』には当時のモンゴル社会の諸問題や自由と革命などを呼び掛け、モンゴル民族の啓蒙を目的とする内容の文章が多く掲載されていたことが明らかである。

1934年に、モンゴル人留学生らによって蒙古留日同郷会が設立され、1935年4月13日から蒙古留日同郷会は『漠声』を発行した。現在現存するのは『漠声』の創刊号だけであり、この雑誌が一体どの期間発行されていたのかは不明である。創刊号のモンゴル語原稿はウルジ、ボルチド、スレン、チゴバダラフらが執筆し、内モンゴルの政治状況や外モンゴルの紹介などの文章を掲載した。そのなか、『刊行に至って』、『前書き』、『希望する計画』、『風に揺れるモンゴル』、『在日モンゴル留学生の責任』、『内モンゴルの自治する原因と自治政権の状況』、『内モンゴル』、『内モンゴルの教育を促進する必要性』、『外モンゴル』、『国際状況を数字で見る』などの評論と幾つかの文学作品が掲載されている。その評論の内容は、モンゴルの社会問題や政治、経済、教育などについて論説し、モンゴル民族の啓蒙を呼び掛けた内容の評論が大半のスペースを占めている。

『新蒙古』は1941年7月から1944年9月まで100以上ページで、計4回出版された。この雑誌の1号～3号が日本の東京で出版され、第4号が中国の張家口で出版された。『新蒙古』の編集員にはサイチンガ、ホルチンビリグ、ブヘウンドソ、ソドナムユンロブ、サイインジャアな

どが務めていた。『新蒙古』には「評論」、「史籍」、「地理学」、「日常知識」、「児童文章」などのコラムが掲載されている。この雑誌を創刊した目的について、蒙古留日同郷会の副長ハブング氏が『創刊に至って』という文章のなかで、「……モンゴルの今日の状況をみると、新しい知識を学ぶことと発展させ、普及させることが非常に重要なことである。日本にいるモンゴル留学生は新しい雑誌を出版し、日本の先進文化をモンゴルに紹介してモンゴルの文化を発展させることがモンゴルの今日の状況と合致し、先進文化を普及させるに近い道である」と述べている<sup>3</sup>。

『新蒙古』に掲載された文章の内容をまとめると、モンゴルの輝かしい歴史を紹介し、民族感情を呼び掛けた評論や民族の文化や経済の遅れている状況を反省し、それを発展させる方法を紹介した文章および人類の文明の発展や科学知識を紹介し、科学を普及させることと民族の結束を呼び掛けた文章などである。この雑誌を『祖国』、『漠声』などと比べると、日本の先進的な文化と技術を紹介する内容が明らかに増えている。

### 3. 満洲国時代のモンゴル語定期刊行物

1932年3月1日、日本の関東軍の支配によって新京に満洲国が建国され、中国の東部地域と東北地域を管轄した。満洲国政府はモンゴル側の行政機関として新京に興安局を設置し、この年に興安局を興安総署に改称した。同政府はモンゴルに対する文化政策の一環としてモンゴル文字の印刷所を開設するとともに、モンゴル語の定期刊行物を発行した。興安総署は、1933年4月に『興安総署彙刊』を刊行し、翌年の12月に『蒙政部彙報』と改名した。この雑誌は中国語とモンゴル語で出版する月刊誌であった。『蒙政部彙報』の第1号の内容には、「公文」、「法律」、「命令文」などのコラムがある上、『満洲国の建国について』、『満洲国の政權を握る者の言葉』、『外国に向ける通知文』などの文章や幾つかの写真を掲載した。『蒙政部彙報』は計15回まで刊行され、1936年3月に『モンゴル・セトグール』(蒙古報)と合併した。

『モンゴル・セトグール』は興安総署総務処調査科によって1934年5月に創刊された。この雑誌は月刊で、B5版であった。『モンゴル・セトグール』には評論、モンゴル地域や世界ニュース、翻訳作品、日本語の講座、子供の欄などが掲載された。その内容は満洲国政府の意図で宣伝色が含まれているとはいえ、モンゴルの啓蒙と復興を訴える評論が多かった。1936年1月(第21号)から満洲国政府の圧力によってモンゴルの復興を訴える評論が減り、ニュースの掲載が増えた。

1934年7月、興安総署は蒙政部に改組され、その管轄範囲も広がった。その後の1937年1月、『モンゴル・セトグール』は『モンゴル・シネ・セトグール』(蒙古新報)へと生まれ変わり、週刊新聞紙になった。『モンゴル・シネ・セトグール』はA3版で、全4ページであった。創刊号に週刊新聞を刊行した目的について『蒙政部は我がモンゴル民族の文化を発展させることを希望し、モンゴル・シネ・セトグールを出版した。我々は満洲国が建国以来日々モンゴ

ル民族の復興のために努め、世界文明と同行しようと、このモンゴル・シネ・セトグールを多くのモンゴル人に配布したことがモンゴルの太陽と比較するものである』と記している<sup>4</sup>。『モンゴル・シネ・セトグール』には、評論、内外のニュース、日本語の学習、読者からの手紙、小説などの内容が掲載されている。その例をあげると、『建国以来の蒙政部行政科の功績』、『日満不可分関係について』、『モンゴル民族の文化はどこにあるのだろうか』、『モンゴル人たちに望むこと』、『興安局総裁の訓辞』などがあり、満洲国とモンゴルの関係やモンゴルの啓蒙を呼び掛ける文章が多く含まれている。この『モンゴル・シネ・セトグール』は1940年12月までに発行された。

1937年7月1日、満洲国政府の意図で興安局の管理下にモンゴル人を対象とした文化機関「蒙古会館」が設置された。この蒙古会館の活動理念は「モンゴル民族自らによる文化発展や民族の能力の向上、仏教の思想および他民族に対するモンゴル人の正しい認識を普及させること」であった<sup>5</sup>。1938年10月、蒙古会館は地域の青年たちにモンゴル語による発表の場を提供するため、『ジャロースン・トリ』（青年の鑑）を創刊した。この雑誌はA4版で、全4ページであった。雑誌の題字をヘーシングエが書き、トゲメルが編集を担当した。『ジャロースン・トリ』は「評論」、「詩歌」、「物語」、「漫画」、「時事ニュース」などのコラムを設けている。創刊号において満洲国参議のチメドサムピルは、「新京にモンゴル青年たちはモンゴルの現状のために努力し、モンゴルの現状と未来のためこの雑誌を刊行した。各国の歴史をみると、民族の復興・向上は全て青年たちの努力と意識にかかっている。この雑誌の目指すものはモンゴルの現状を中心に民族の未来を考えることである」と述べている<sup>6</sup>。『ジャロースン・トリ』はモンゴル人たちによって自発的に発行された雑誌であったが、その第2号を準備中に興安局によって発行が中止された<sup>7</sup>。

1940年12月、蒙古会館が閉鎖され、その代わりに新京で1941年1月にモンゴル語出版社フフ・トグ社が設立された。フフ・トグ社の社長に菊竹実蔵、編集者に竹内正、ダイチン、バヤンなどが務めており、モンゴル人23名、日本人7名の職員、通信員70余名がいた<sup>8</sup>。フフ・トグ社が設立されると、それ以前の『モンゴル・シネ・セトグール』を『フフ・トグ』と改名し、1941年1月6日から発行し始めた。『フフ・トグ』紙の1号～75号が7日に一回、76号～178号が10日に一回出版されていた。最初はA2版で、全8ページの新聞であったが89号からページ数が減り、4ページになった。『フフ・トグ』紙の創刊の目的として「モンゴル民族の再興と文化向上、世界文化とは同様なレベルになること」と記している<sup>9</sup>。新聞の内容は、第1ページに国内と外国のニュース、「一週間の世界の出来事」コラム、第2ページ、第3ページに「満洲国」、「右モンゴルの情報」というコラムと興安4省の政治、経済、教育、スポーツ、軍事などのニュースを掲載していた。4ページから8ページはコラムであり、「健康と家庭」、「家畜」、「文芸」、「今日の出来事」、「読者からの手紙」、「日本語会話」と「子供のフフ・トグ」などの内容が含まれている。『フフ・トグ』紙は8000部以上印刷され、興安4省と他のモンゴル旗、



熱河省、錦州省、瀋陽、右モンゴル旗、日本、中国、朝鮮などのアジアの多くの国やドイツ、イタリヤなどの世界の多くの国にも送られていた。

これ以外、フフ・トグ社は1943年1月20日から『イフ・フフ・トグ』（大青旗）という雑誌を発行していた。『イフ・フフ・トグ』は「東アジアの共同発展」と「モンゴル民族の伝統文化の継承」を目的とし、政治評論、ニュース、科学知識、文学の翻訳、漫画、日本語講座などを掲載していた。この『フフ・トグ』紙と『イフ・フフ・トグ』は1945年8月満洲国が崩壊するまで発行されていた。<sup>10</sup>

#### 4. 蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物

1936年2月、日本の関東軍の援助によって内モンゴルのソニト右旗に蒙古軍総司令部が設立され、この年の5月に蒙古軍政府が設立された。1937年7月7日の盧溝橋事件の後に日本は内モンゴル方面へ本格的に出兵し、10月に包頭を占領した。雲王（ユンデン・ワンチュク）・徳王（テムチュクドンロブ）・李守信がこれに応じる形で10月28日に厚和（現在のフフホト市）にて蒙古聯盟自治政府を樹立した。最初は雲王が主席に就任し、翌年3月に雲王が病没すると、徳王が後任の主席となった。蒙疆地区には、蒙古聯盟自治政府の他に察南自治政府と晋北自治政府が設立されたが、利害関係を調整して活動の円滑化を図るため、1937年11月に3自治政府によって蒙疆聯合委員会が設立された。

1939年9月に日本関東軍の主導のもとで、3自治政府を統合して蒙古聯合自治政府が張家口に樹立され、主席には徳王が就任した。この蒙古聯合自治政府は名目としては中華民国臨時政府・汪兆銘政権下の自治政府という位置づけだった。その後の1941年8月には蒙古自治邦政府と改称した。日本の「東アジアの新秩序の樹立」や蒙疆政権の自らの基盤を固める宣伝の必要性から張家口に善隣協会、蒙疆新報館、蒙古文化館などを設置し、定期刊行物を発行した。

1938年6月、蒙古聯盟自治政府の外務省は『蒙古週刊』を厚和に創刊した。この雑誌はA3版で、全4ページであり、約5000部発行していた。1939年9月に張家口に移動した後、蒙疆政権の蒙古新報部が編集し、蒙疆新報館が出版するようになった。1940年2月に『蒙古週刊』を『蒙古報』と改称し、モンゴルの復興、や文化向上及び「東アジアの共同振興」がその目的であった。雑誌の内容には世界の出来事、蒙疆地域のニュース、時事政治の解説などが含まれている<sup>11</sup>。モンゴル各旗の役所、学校などに配布する以外、中国北部、満洲国、日本などに送っていた。『蒙古報』は1945年8月まで発行された。

1939年1月1日から蒙古文化館は『文化専刊』を発行した。この雑誌はA4版で、モンゴル語と中国語で発行されている。同年の9月1日まで計5号発行され、蒙古聯合自治政府が張家口に移動する際一時休刊となったが、1940年1月1日から復刊し、雑誌の題名を『蒙古文化刊』と改称した。その後計7号発行されていることが確認されている。この雑誌には「評論」、「文

芸」、「様々な出来事」、「特筆」、「著名人の紹介」、「世界ニュース」などのコラムが設けられ、民族文化の向上に関する評論、民族の文化や歴史の紹介、徳王の講演や詩歌などの作品が掲載されていた。

1940年10月、蒙疆新報館のモンゴル編集部の編集者や記者たちを中心に蒙古文化会を設立し、モンゴル地域から多くの会員を募集した。この蒙古文化会がモンゴル民族の文化向上を目的に『蒙古復興の声』を創刊した<sup>12</sup>。この雑誌は月刊誌であったつもりだが、原稿が少なかつたため発行が遅れるか、ニッカ月に一回出版された。毎号が数百万部印刷し、会員や援助した人々に送っていた。『蒙古復興の声』の9号の『通知』で創刊の目的について「……政治の興亡は文化向上の有無に依る。[中略]我がモンゴル民族の再興に貢献し、人々の素質を向上させる道であることを希望する」と述べている。雑誌の内容には、「評論」、「時事ニュース」、「詩歌」、「物語」、「健康」、「特論」、「笑い言葉」、「モンゴル日本談話」などのコラムがある。『蒙古復興の声』は蒙古文化会の記者、編集者を中心に一般の読者を含めた民間から運営する雑誌とはいえ、日本軍および蒙疆政権の援助で運営されていたため、日本と日本軍を称え、中国共産党やソ連を批判した内容を含みながらモンゴル民族の再興や文化向上のために雑誌を刊行していた。

1942年8月、蒙疆政権から日本に留学した学生らが組織した日本留学同窓会が成立した。この会の機関誌である『蒙古復興』が1945年4月に創刊された。創刊の目的は「人々の需要に対応し、モンゴル民族の文化発展に貢献すること」である。『蒙古復興』の創刊号に『創刊に至って』、『モンゴル民族歴史の真実』、『モンゴル民族歴史の書籍について』、『世界歴史に記述されるモンゴル』、『民族と人口』、『人口問題と病気』、『公社』、『井戸の中に冬眠する龍について』、『主婦の知るべき知識』といったタイトルの文章を掲載している<sup>13</sup>。雑誌の編集員にゴンブジャブ、サイチンガ、チゴバダラフ、テムルトシ等がいた。この『蒙古復興』はただ2号まで出版され、蒙疆政権の崩壊に伴い発行が中止された。

## 5. おわりに

1929年から1945年までのモンゴル語の定期刊行物はモンゴルの出版物の歴史上でも大きな意味を持っている。20世紀初期に内モンゴルから日本へ留学生を派遣していた。これらの留学生は日本で学びながらモンゴルの啓蒙のため新聞や雑誌を発行し、モンゴル社会の問題点を探り、日本や世界の状況を紹介していた。また1932年から1945までの日本の直接な支配による満洲国の時代にモンゴルに対する宣伝の必要性からモンゴル語の新聞や雑誌が発行されていた。これらの新聞や雑誌は日本や日本軍の宣伝色を含みながらモンゴルの文化向上を目指していた。ほぼ同時に日本軍の援助で内モンゴル西部に樹立された蒙疆政権の時代にもモンゴル人自らの文化向上および宣伝のためモンゴル語の新聞や雑誌を発行していた。これらの新聞や雑誌はその程度が違いとは言え、それぞれ日本の影響を受けていたことは違いない。

本論では、在日留学生時代、満洲国時代、蒙疆政権時代という三つの時期に分けて日本の影響を受けていた新聞や雑誌の発行時期、発行目的、内容、編集者、時代背景などを解明することを試みた。一部の新聞や雑誌の入手が困難であったため、分析は不十分で、残された課題も多くある。今後もっと詳細に分析をするように努める。

## 注・引用文献

- <sup>1</sup> 内田孝 (2008) 「『新モンゴル』誌第2号とモンゴル人留学生による文芸活動」『北東アジア研究』、第14-15合併号、227頁。
- <sup>2</sup> 忒莫勒 (2003) 「蒙古留日同郷会的出版物」『民族古籍与民族文化』、呼和浩特市民族事务委员会、第3-4期。
- <sup>3</sup> 『新蒙古』、1941年7月。
- <sup>4</sup> 『モンゴル・セトグール』、1937年1月。
- <sup>5</sup> 広川佐保 (2007) 「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」『環日本海研究年報』、111頁。
- <sup>6</sup> 忒莫勒 (2002) 『民国年間的几种蒙文旧报刊』、蒙古学信息、第3期。
- <sup>7</sup> 前掲、「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」、111頁。
- <sup>8</sup> 『フフ・トグ』、1941年11月8日。
- <sup>9</sup> 同上。
- <sup>10</sup> 同上。
- <sup>11</sup> 新聞出版編集委員会 (2003) 『蒙古研究全集 新聞出版』内蒙古人民出版社、376頁。
- <sup>12</sup> 忒莫勒 (2007) 『「蒙古文化及其『復興蒙古之声』」』『蒙古学問題与争論』、第三期。
- <sup>13</sup> 二木博史 (2001) 「蒙古政権時代のモンゴル語定期刊行物について」『日本モンゴル学会紀要』31号、17-43頁。

「付記」本論文は、公益財団法人住友財団の2013年度「アジア諸国における日本関連研究助成」による研究成果の一部である。



## **The article point**

### **About Mongolian periodical literature under the influence of Japan**

BING, Jun

As for the periodical literature of Mongolian published from 1929 through 1945, the most were affected by Japan.

I can divide Mongolian periodical literature of this time at three time called the Manchurian country era, the Mongolia Border government era for the foreign student era residing in Japan. For the foreign student era residing in Japan, it is a newspaper and the magazine which the Mongolian foreign students who studied from 1906 in Japan published. For the Manchurian country era, it is a newspaper and a magazine of Mongolian published under the management of the Manchurian country established in the eastern part and the Tohoku area of Inner Mongolia by the rule of the Japanese Kanto military from 1932 through 1945. The government era is Mongolia Border a newspaper and a magazine published under the management of the Mongolia self-government government which was in the western part of Inner Mongolia from 1937 through 1945.

By the main subject, I clarified each publication background and publication time, publication purpose, publication engine, publication contents about these three periodical literature of Mongolian published at time.